

丹沢と私

丹沢で面白い話といえは・・・

丹沢は全山爆撃

関東地方に就職した後、お登りさんとして名所を訪ねる事が楽しみの一つでした。その頃は東京近郊で働いていたので、奥多摩へのハイキング用に、靴・ザック・雨具等を用意していました。後に丹沢も有名だと知り、ユースンを中心に雨山峠、塔ノ岳、丹沢山、蛭ヶ岳と、主脈の一周を考えました。登山地図を読むと、どうやら一泊する必要があると判明。友達と私はオートキャンプ用の四千円という安物テントと、ブルーシートをフライシート用に購入し、ユースンまで車で乗り付けました。

考えてみれば、兵庫県や京都府にいた頃は、ハイキングといっても雨具も持たずに必ず晴天の日を選び、物見遊山していた程度。就職後は経済力が付いたとはいえ、テント用に発売されてまだ10年のゴアテックスは高嶺の花で、ゴム引きに近い雨具でのいていました。

安いけれども思い装備を背負い、雨山峠から鍋割山の辺りまで辿り着きました。小屋も固有名詞ではなく、幾つかある小屋の一つといった程度の認識しかありませんでした。

どの辺りでしたでしょうか、突然、背後の数から、おじさんが現れたのです。そして、

「君たち、丹沢は全山爆撃なのを知らんのか」と言われたのです。

「爆撃ですか？」我々が問い返すと、「違う、幕営（ばくえい）だ、テントを張る野営の事だ。丹沢は全山幕営禁止なのだよ」と教えてくれました（丹沢は国定公園で保護されています）。

登山用語を聞き間違えるくらい、我々は何も知らなかったのです。そして、銀マツトを持ち、一見してテント山行とわかる自分たちの格好に気づき、赤面したのでした。同時に、小屋泊まりとなれば重い荷物を苦労して担ぎ上げた意味が全く無くなるという衝撃も味わいました。

山小屋に泊まる費用を予定していなかった我々は、おじさんの指摘を素直に受け入れる事ができませんでした。塔ノ岳を過ぎ、暗くなったらビバークしてしまう構えを見破ったおじさんは、我々の後から執拗について来るのです。

そして遂に塔ノ岳までご一緒することとなり、重い荷物に負けて一泊する事を決めたのでした。

これが私にとって初めての山小屋でした。テント禁止の山域で、明らかにテント装備

で小屋に泊まっている我々は、場違いだったに違いありません。



(1986年、尊仏山荘の改装工事)

当時、塔ノ岳にある日の出山荘が運営されていたか定かではありませんが、塗装の緑色が鮮やかで、田舎の山にはない山小屋が二つも備わっているすばらしい山なのだと感じました。当時の尊仏山荘は改装工事中で、泊まったのは横に残ったスレート葺きの平屋で二段式かいこ棚だったと記憶しています。

爆撃といえば、キューハ沢に米軍の爆撃機が墜落した残骸のエンジンが今でも見られるそうです。あの時のおじさん、お元気でしようか。丹沢山・みやま山荘の写真も載せておきます。

都会の方が豊かな自然？

話が前後しますが、東京にいたころ初めて奥多摩へハイキングに行ったとき驚いたのは、広葉樹林の存在でした。田舎で森林といえば、ことごとく植林されていて、杉とヒノキの暗い林ばかり。あとは柿や庭木しか見たことの無かった私は、明るいブナ林と、その下に広がる豊かな中低層の草木に都会を感じたものです。

今から考えれば、田舎でも林業に向かない場所は、さすがにブナ林ではないにしても、手つかずの藪山なのです。そんな所には用も無く、行った事がないだけだったのです。丹沢も奥多摩も下のほうは林業に利用されており、田舎と変わらないのですが、

私の主観的体験世界は、かくも狭かったのです。



(当時の みやま山荘)

それから

その後、引越して神奈川県に住むこととなりました。山登りは、そのころ道楽の中の一つに位置づけていましたので、年に何回か大きな山に登ることができればよいと思っていました。あの重いテントとブルーシートで5月の尾瀬、夏の白馬縦走、立山と、妻といっしょに歩きました。

子育ての頃は大変で、山へ行くことはありませんでした。それでも運動不足解消のため、日帰りで丹沢へ出かけるようになりました。

丹沢の沢へは知人と時々行く程度でしたが、その人が山を卒業してしまい、単独が山岳会に所属するかの選択を迫られました。結局、両方やってみて、思いたった日に行ける単独スタイルがほとんどとなります。安全のため、リードする事にはこだわらず、トップロープにしています。滑るので、無理をしても危険なだけです。

本当は怖い丹沢

HPで丹沢を紹介する私ですが、やはりアウトドアには、それなりの危険があるものです。たいていは何事も無く帰ってこられるのですが、運悪く帰ってこられなかった方もおられるのです。後悔しないためには装備・計画・体力・技術・システムが重要です。ただ、行程が長いだけに、隙の入り込む余地は多いのです。

できるだけ、自分を笑ってもらいたいところですが、事例となると、どうしても他人様の話に及んでしまいます。お許しください。



持病で倒れたのか、倒れて打ち所が悪かったのか、大倉尾根を下っていると倒れた人に声をかけている人がいました。

倒れた人は目を開けたまま、全く動かないので、これは危ないと思って状況を聞いたところ、呼吸も心臓も停止している様子。これは大変だ、心臓マッサージと人工呼吸をせねばと思いました。

偶然、すぐ後に救急救命士の方が降りてきており、即座にプロへお任せしました。私は言われるままに足を上下させて血液を心肺の方へ送る係りになりました。斜面ではなかなか姿勢が安定しませんが、上下方向に寝かせ、下側の足を持ち上げて蘇生を試みました。

救命士は手ぬぐいを介して呼吸を送っておられました。似た職業の知り合いがいて後で聞きましたところ、人工呼吸での感染リスクを避けるため、現場で職業的に人工呼吸をする人は、口と口の間に専用のパイプをあてがうそうです。

大きな声で名前を呼びかけながら蘇生を試みましたが、瞳孔が少し変化しただけで残念ながら蘇生しませんでした。私は途中で解放させていただきましたが、結局ヘリコプターを呼んで、ご遺体を運搬して頂いたようです。

後で同じところを通ったとき、花が供えてありました。

おくやみ申し上げます。

丹沢でも、何箇所かひっそりと遭難碑があったりします（尾根道には見当たらない）。遭難の多い山では、これ以上遭難碑を建てないよう指導されているようですが、丹沢もきつとそうなのでしょう。古い遭難碑が、気を抜かないよう無言の指導標となっています。そういう意味で、たいへんありがたいです。場所を明らかにする目印にもなります。

山岳会でも、事故の教訓を聞かされます。アルパインクライミングを行う山岳会の多くが死亡事故を経験しているようです。極限において、どのスポーツでも勝利と健康は必ずしも一致しないものです。山は特にリスク管理、つまり遭難対策費用や体制、万一の場合の計画を明確にしておく必要があります。山岳会の意義があるのです。それができない個人や同好会は、アルピニズムを採用すべきではないという事です。

私の場合、まあ大丈夫だろうという範囲で、その要素を楽しむ事にしています（本当に大丈夫なのかガリスクです）。

事故の話は、いくらでもありますので、この辺にしておきましょう。

怪談

ある夏の日、水無川の本谷を逆行しようと、戸沢林道から本谷右岸を一人で歩いていました。その日は雨が降りそうで暗く、増水した場合のエスケープルートが厳しいそこで、F1まで行って判断し、引き返して懸垂岩に変更する選択肢を思い描いていました。

大倉から歩くとおなががすくので、少し行動食を食べました。谷底なので、振り返ると茂った木の下は真っ暗で何も見えません。

その時です、闇を背後にして岩の上に向か白いものが立ち昇りはじめました。

「うわーっ！」心の中で叫びました。

中央が太く両側に2本、棒状の白いものが、揺れながら、しだいに長く上に伸びていきます。すると、

「こんにちは」

帽子とザックの登山者が現れました。暗いので、シャツの胴体と腕だけが見えていたのでした。

目を丸くし、パンを口にしたままの私は、一般ルートを聞かれて、再びおどろきました。この辺りは昔、鉱山があったそうので、当時の道かトロッコ跡が登山道に見えるのです。それを一般道と間違えて登ってこられたのです。それにしても、途中は道が無

い所もあり、道ではない旨の標識が必要なのかもしれません。

自然へのインパクト

沢ルートは岩が多く、植物を傷つけることが少ないのですが、藪こぎになると、かなり環境へのインパクトがある登山形態となってしまう。ただ、登る人数が限られているので問題にされていないだけだと思います。獣道を人間が利用するくらいですから、鹿の採食も含めた自然発生するインパクトに比べて少ないと言い聞かせながら歩いています。

そんな登り方をしておきながら、尾根道で登山道を外れて歩く人に向かって、登山道を歩くようお願いする私です。根まで傷んでしまうと、土が雨に流され、侵食が進んでしまうからなのです。

人のことを言えた自分ではないですが、罪ほろぼしと自称してお願いしています。かつて丹沢ゴミひらいや、最近では自治体から委嘱されたボランティア活動で罪ほろぼしをしているつもりです。

コックちゃんのHPには、次のようなコンテンツもあります。読んでみてください。
「その他」のページに自分の話で

- ・怖い話（こっちは本物の怪談）
- ・やっぱり中岳沢は怖い（雪崩）
- 「沢」のページに
- ・くちびるから夢を（事故の劇画）

2009年5月、2011年1月

「コックちゃんマガジン」は主観的な体験世界を表現しており、誇張や事実の無視などによる一方的な見解を楽しむ読み物です。